
Death Flag Stand

黒川ザキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Death Flag Stand

【Nコード】

N8390Z

【作者名】

黒川ザキ

【あらすじ】

探偵事務所を営んでいる山本真一の前に、死神ホロンが突如として現れた。ホロンが懐から出したノートに、なぜか山本の名前が……。死神によると、ノートに名前が記載されるということは、その本人に『死亡フラグ』が立ったということである。山本は『死亡フラグ』を回避することはできるのか、北欧神話をベースとしたコメディ小説を目指します！

三月二一日、本日は快晴なり。

アリのように人が溢れかえる都会の上空に、少年は浮いていた。鳥のようににはばたくことなく、風船のようにぷかぷかと。

柔らかな純白の髪。黒を基調としたロープを身にまとい、背丈を超える大鎌を片手に、少年の青い双眸はある男を見つめていた。

男は今しがたコンビニを出て、帰途についていた。くたくたのスーツ、櫛の通っていないボサボサの髪。前髪からのぞかせる狐目はどこかやる気のない。この一見冴えない男こそ少年の標的である。

風は強く、髪はなびく。少年は懐から黒いノートを取り出し、強風に飛ばされまいと注意をはかりながら、ノートを開く。

そこには、男の名前 山本新一の名前が書いてあった。少年は名前を確認すると、顔を強張らせる。

『大丈夫だ』と少年は自分に言い聞かせ、『女王直々に任命された名誉ある仕事だ』と少年は自分を奮い立たせた。山本新一を見失いように、彼の動向や表情さえもまじろがずに観察していた。

きらめく高層ビルディングが立ちならぶ中に、身を細めるようにして3階建てのコンクリートビルディングが建っている。

1階は喫茶店で、2階の窓には『山本探偵事務所』とゴシックの書体、白のペンキで書かれていた。1階の右わきにある階段を、山本は上った。

少年はゆっくりと2階の窓近くまで下り、中の様子をうかがう。

光沢のある立派なデスクが目の前にあり、彼は窓を背に椅子にもたれかかって目を閉じていた。

デスクの上には、彼が先ほどコンビニに買ったコーヒー牛乳とアンパンが未開封の状態で置いてあった。

その時、少年はアンパンに目を奪われた。この時のことを振り返ってみると、少年はなんと愚かなことをしたのだらうと後悔する。

昨夜初任務がうまくいくかどうかが不安に思い、のどが食事を通ることを許してくれなかった。それは、今日の朝でも同じである。

つまりは、少年は二回分の食事をぬいていたために、とてつもない空腹感が牙をむき出しにして襲いかかってきたのである。

なにより、彼の大好物であるアンパンを目の前にして、食欲という衝動が理性というダムを決壊させるのには、さほど時間を要することはなかった。

少年は窓をすり抜ける時、少年の目にはもやは男の存在は映っていない、アンパンという自分の糧となる存在以外は映りもしなかった。無我夢中とは、このことを指すのだろう。

アンパンをパクリとかぶりつく。ふんわりとしたパンの中には、なめらかなこし餡が詰まっていた。素朴ながら深い甘美な味わいが、少年の頬をいともたやすく緩ませる。

しかし、幸せは長くは続かないことは、太古の昔からの決まりごとのようなものだ。

「おい、少年！勝手に私のアンパン食うんじゃない」

少年の後ろから、怒気に満ちた声が聞こえた。

仕事において大事なのはイメージだと、山本新一は自負している。それはサンタ然り、清纯派アイドル然りである。

冷静に考えてみれば、サンタなんぞ不法侵入の罪を犯したロリコンであり、清纯派アイドルだってアダルティな生物的繁殖行為もするだろう。

それでも、彼らが世間様から尊敬、羨望されているのは、彼らがその称号にふさわしいイメージ通りの行動を起こしているからである。

その原理でいくと、探偵はどうだろうか？

解決不可能と思われる事件を探偵は鮮やかに真相を究明し、犯人を指さして、「真実はいつも一つ」と言えば、それらしいといえ、それらしい。

つまるところ、頭脳明晰にして、紳士たる男こそが探偵となる資格を備えているのではないか？

そんな資格は持ちあわしていないと、自分でも思っている。ポケットの中を調べてみても、虚栄心などくだらない俗物しか見つからない。

今日も今日もとて依頼などなく、いつものコンビニでいつものコーヒー牛乳とアンパンを購入して、我が事務所に帰るだけだった。

厳かな冬が過ぎて、春は近い。寒さが次第に緩み、陽気な日差しが有楽町を包み込む。

だけど聞こえてくるのは鳥のさえずりではなく、都会独特の雑音ノイズ。自動車はエンジン音とクラクションをかき鳴らして、歩道を歩く通行者の足音と携帯電話との会話。

都会に暮らし慣れた山本だが、今まで聞こえなかった雑音が今日はやけにはっきりと聞こえる。

胸にわだかまり　底知れぬ不安という粘着性の強い感情がび

っちやりと張りついていた。

高層ビルの間に挟まれて、身を縮こまっているコンクリートビルの一階の脇にある階段を上る。2階のドアには、山本探偵事務所と書かれており、そのドアを山本は開いた。

窓側に最近購入したばかりの立派なデスクがあり、傍らに予算不足のためデスクとはアンバランスの関係にあるパイプ椅子が鎮座していた。

山本はそのパイプ椅子に座り、嫌な不安をかき消そうと目を閉じる。

ほんの数秒にして、不安は現実のものとなる。

ビニールが破ける音ともに、目を開く。目の前に映るは、少年。それも黒いロープを着て、右手には背丈を超える大鎌、左手には丸が欠けたアンパン。口をもぐもぐと、幸せそうに頬張らせる。

いろいろとツツコミどころ満載な光景ではあるが、山本が最初に思ったのは、不法侵入加えて、人のアンパンを食べるという強奪罪を犯している少年。

ゆえに、山本が発した言葉がいかに主人公にあるまじき発言かが問う必要性があるが、発してしまったものは、しょうがない。

「おい、少年！ 勝手に私のアンパン食うんじゃない」

これが山本と死神とのワーストコンタクトである。

少年の時間が止まる。片手に持っていたアンパンは床に落ちるとい
う死を遂げ、少年は口をアングリと開け、驚愕の表情を浮かべる。

「……なんで僕が見えるの？」

「言い訳なら、署で聞くよ」

「どんな言い訳なの！ しかも、それ警察のセリフだよ！」

大声でつつこんだ少年だがハツと現実に返り、勢いよく首を左右
に振る。

「……そういえば、靈感がかなり強い人は死神が見えるって言っ
たな」

少年はなにか小さくつぶやいたが、山本には聞こえなかった。

「とりあえず手に持つてる鎌、置いてもらえるか。怖いから」

「あ……はいっ」

山本はデスクの前にあるソファにゆっくりと座り、テーブルを挟
む一方のソファに少年を座らせた。少年の視線は、不安そうに揺れ
動く。

「とりあえず君の名前は？ この探偵事務所にご用？」

「えっと……僕は、死神のホロンと言います。実は、そのお……山
本さんの命をもらいうけに……きました」

ホロンは、硬い表情のままなんとか笑う。山本はそんな苦く笑う
ホロンに見て、表情をゆるませた。

「じゃあ、警察署行こうか」

「行きません！」

このままでは話がラチが明かないと思ったホロンは、山本が口を
開く前に言葉を続ける。

「実は、山本さんに『死亡フラグ』が立ちました」

「死亡フラグ？」

「はい、近々死んでしまう可能性が高い者は、この黒いノートに名

前が記載されるんです。それを死亡フラグが立ったと言います」

そう言って、懐から出した題名も書かれていない黒のノートを開く。

山本はじつと見る。そこには多数の名前が書き込まれており、中に「山本新一」も含まれている。

「ふーん、そんな便利なのができたんだ」

山本はボソツと呟く。ホロンは聞き取れず首をかしげるが、気にせず話を続けた。

「それで、死んだ山本さんの魂を冥界へと誘うのが僕たち、死神の仕事なんです」

自分の仕事に誇りがあるのか、ホロンは自慢げに言う。

「わかった。とりあえず、アンパン食べたことを謝るうか？」

「あつ、ごめんなさい。……いまさらですか!？」

ホロンの謝罪に山本は満足そうに笑うが、すぐに真面目な顔へと変わる。

「それで、ホロンはこれからどうするつもりなんだ？ 俺を殺すの？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8390z/>

Death Flag Stand

2012年1月6日09時45分発行